

山部赤人「富士の山を望る歌」の聖武天皇即位寿歌としての機能

In the Poem on the Distant View of Mt.Fuji Composed by YAMABE-NO-Akahito, the Function as the Song of Congratulation on the Emperor SHOMU's the Succession to the Throne

鈴木 武 晴

SUZUKI Takeharu

一、序

万葉集巻三に収録されている山部赤人の「富士の山を望る歌」(三
一七〇八番歌)は、巻三の次のようなⅠ～Ⅴの「聖なる山を主とする
山水歌群」の中に存在する(拙論「万葉集巻三の山を主とする山水歌群に
おける山部赤人の富士歌と高橋虫麻呂の富士歌」、都留文科大学研究紀要第95
集、二〇二二年三月発行)。

Ⅲ富士の山を詠む歌一首并せて短歌(三一九～三二一番歌)

右の一首は、高橋連虫麻呂が歌の中に出づ。類をもちてこ
こに載す。

Ⅳ山部宿禰赤人、伊予の温泉に至りて作る歌一首并せて短歌(三
二二～三三番歌)

Ⅴ神丘に登りて、山部宿禰赤人が作る歌一首并せて短歌(三二四
～三五番歌)

Ⅰ～Ⅴには、

Ⅰ暮春の月に、吉野の離宮に幸す時に、中納言大伴卿、勅を
奉はりて作る歌一首并せて短歌 いまだ奏上を経ぬ歌(三二五
～三六番歌)

Ⅱ山部宿禰赤人、富士の山を望る歌一首并せて短歌(三二七～八
番歌)

Ⅰ吉野の「山」

Ⅱ富士の高嶺

Ⅲ富士の高嶺

IV 伊予の高嶺

V 神丘 (みもろの神なび山)

のように聖なる山が並んでいる。Ⅲの歌は後の追補で、Ⅲを除いた、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴの一連の歌群が卷三「原本の様相と考えられる。これは、Ⅰの大伴旅人歌にⅡ・Ⅳ・Ⅴの赤人歌がリンクした形で、このように並んでいた山部赤人の歌資料にそのまま捫ったためと推定される(以上、上掲拙論)。

そこで「聖なる山を主とする山水歌」の連繋という形式面のみならず、歌の内容の本質面においての大伴旅人の吉野讃歌と山部赤人の富士讃歌の連繋に考察の手を及ぼすと、極めて重要なことがわかった。論のタイトルに象徴させたことであるが、以下に具述する次第。

二、大伴旅人の吉野讃歌と聖武天皇の即位宣命との関連

Ⅰの大伴旅人の吉野讃歌は、神亀元年(七二四)三月の一日、五日の聖武天皇の吉野離宮行幸(『続日本紀』)の時に奏上するために作られた歌である(ただし未奏)。歌を掲げよう。

み吉野の吉野の宮は 山からし貴くあらし 水からし清けくあらし
天地と長く久しく 万代に改らずあらむ 行幸しの宮
(三二五番歌)

反歌

昔見し象の小川を今見ればいよ清けくなりけるかも (三二

六番歌)

長歌三二五の「天地と長く久しく 万代に改らずあらむ」(原文「天地と長久 万代爾不改将有」)について、清水克彦氏(旅人の宮廷儀礼歌『萬葉論集』(昭和四十五年九月五日、桜楓社発行)所収)は、神亀元年(七二四)二月四日の聖武天皇の即位宣命(第五詔)の中に引用されている次のような元明天皇の詔の、

掛けまくも畏き淡海大津宮に 御宇しし倭根子天皇の、万世に改るまじじき常の典と、立て賜ひ敷き賜へる法の随に、後遂には我子に、さだかにむくさかに、過つ事無く授け賜へ(原文「挂畏淡海大津宮御宇倭根子天皇乃、万世尔不改常典止、立賜敷賜閉魯随法、後遂者我子尔、佐太加尔牟俱佐加尔、無過事授賜」(本文の引用は新日本古典文学大系『続日本紀二』(一九九〇年九月二七日、岩波書店発行に拠る))

の傍線部を踏まえた表現であることを指摘し、次のように述べている。

これは宣命に対する随順の意をあらわした事になるのであり、ひいては、その宣命を発した天皇に対する随順と、讃美の心を表明した事になりはしないかと思うのである。のみならず、「不改」が「不改常典」をふまえた字面であつてみれば、この部分から、もつと具体的に、旅人の律令制国家への讃意をも読みとるべきかも知れない。

重要な見解である。大伴旅人の従三位から正三位への昇叙に触れる聖武天皇の即位宣命を旅人は鮮明に心に刻みつけていたであろうし、「中納言」という職掌柄、旅人はこの宣命の字面に接する機会をもったと推定されるのである」（清水氏先掲論文）。

旅人の吉野讃歌が聖武天皇の即位宣命の表現を踏まえ応用して詠み成された歌であることは、確実と思われる。

清水氏の見解に導かれて、旅人の吉野讃歌と聖武天皇即位宣命とを仔細に見ると、旅人歌の長歌三一五の「水からし清けくあらし」の「清けく」（原文「清」と反歌三一六の「いよよ清けく」の「清けく」（原文「清」）は、文武天皇即位宣命（第一詔）の「明き^{あか}淨き直き誠の心」（原文「明支淨支直支誠之心」）、文武天皇の宣命（第二詔）の「明き^{あか}淨き心」（原文「明支淨支直支誠之心」）、元明天皇即位宣命（第三詔）の「淨き明き心」（原文「淨明心」）を受けての聖武天皇即位宣命（第五詔）の「清き明き正しき直き心」（原文「清支明支正支直支心」）の「清き」を意識しての表現と考えられる。

万葉集では、原文「清」と「淨」は文脈によって「きよし」とも「さやけし」とも読まれている文字である（巻六・一〇六五と巻十九・四一八七、巻三・三三四と巻十・二二六など）。『時代別 国語大辞典 上代編』（一九六七年十二月十日、三省堂発行）の「さやけし」の「考」には、

類義語にキヨシがあつて、同じ漢字で表記され、ほぼ同様な対象の描写に用いられる。「河見れば^{さやけく}佐夜久清之」（万三三三四）や第三例の歌（稿者注、続紀宝龜元年の歌）のように重ねて用いられることもある。この二語の違いをはつきり説明することは困

難であるが、キヨシが対象の汚れない状態をいうことが多いのに対して、サヤケシはその対象から受けた主体の情意・感覚についていうことが多い。

とある。『萬葉集釋注三』（一九九六年五月二十五日、集英社発行）の巻六・九〇七番歌の「清みさやけみ」（原文「清々」）の語注にも「対象讃美の語。『清し』と『さやけし』はともにク活用形容詞で、だいたい同じ意味を示すが、対象の清らかな状態に重きを置く『清し』に対し、『さやけし』は対象の状態からうけるさわやかな感じに焦点を置く傾向がある。」と記している。

『続日本紀一』（一九八九年三月二〇日、岩波書店発行）には文武天皇即位宣命の「明き淨き直き誠の心」について、「明・淨・直はいずれも、天皇が臣下に求める忠誠心をあらわす語。」（四頁脚注一二）とあり、先掲『続日本紀二』には聖武天皇即位宣命の「清き明き正しき直き心」について、「明・淨（清）・正・直は、天武朝以来、臣下に要求されてきた心構え。ここでは清・明の順であることも元明即位詔と似ている。」と注している（二四二頁脚注五）。

旅人は聖武即位宣命の臣下の心構えの最初に押し立てられている「清」を自然の山の品格描写に応用したのである。旅人の心には、柿本人麻呂が吉野讃歌（巻一・三六〇九）の長歌三八に詠んだ「山川も依りて仕ふる神の御代かも」（「われらが天君の代は山や川の神までも心服して仕える神の御代であるよ。」の意）の表現が息づいていたであろう。

旅人の反歌三一六に目を移すに、「昔見し象の小川を今見れば」の「今」は、聖武天皇即位宣命の

遠皇祖の御世を始めて、中・今に至るまで、天日嗣と高御座に坐して、此の食国天下を撫で賜ひ慈しび賜はくは（傍線部は稿者）

の「今」を意識しての表現と考えられる。また同じく反歌三二六の「いよさやけく」（原文「弥清」傍点は稿者）も、聖武即位宣命の次のような傍線部を応用した表現と言えよう。

高天原に事はじめて、四方の食国天下の政を、弥高に弥広に天日嗣と高御座に坐して、大八嶋国知らしめす倭根子天皇の（後略）

清水氏は慶雲四年（七〇七）七月十七日の元明天皇即位宣命（第三詔）にも、次のように「不改常典」という言葉を二度用いていることを指摘している（傍点は清水氏）。

・是者関母威岐近江大津宮御宇大倭根子天皇乃、与天地共長与日月共遠不改常典止立賜比敷賜霸留法乎
・又天地之共長遠不改常典止立賜霸留食国法母

そして、二つの傍点部分が、

旅人作の「天地与 長久 万代爾 不改」の部分と類似しており、出典としては、これをも考慮に入れるべきもののようにも思われる。ことに後者は、前者に比していっそう旅人の字面に

近い。

と述べている。が、「歌の字面で『長久』にあたるところが、前者では『長』と『遠』、後者では『長遠』になつて」いることなどから、「この部分が旅人によつて思い起こされたかどうか就いては、わたくしは見解を保留する他ない」と記している。

この点を明らかにするためには、聖武天皇の即位宣命とそれ以前の天皇の即位宣命などの宣命とを比較考察することが必要である。

三、聖武天皇の即位宣命の表現考Ⅰ

——先行する天皇即位宣命などの宣命との関連

聖武天皇即位宣命（第五詔）の構成を、先掲『続日本紀二』の脚注を参照して示せば、次のとおり。

冒頭部

第一段

天孫降臨神話に基づく元正天皇に対する修辭と元正天皇の聖武への詔の引用

第二段

元正天皇の詔の引用にはじまり、そのなかに元明の詔が引用され、最後が聖武の詔

第三段

即位に際しての大赦・授位などに関する詔

宣命冒頭部の「現神と大八洲知らしめす倭根子天皇が詔旨らま」と勅りたまふ大命を親王・諸王・百官人等、天下公民、衆聞きたまへと宣る。」は、文武天皇元年（六九七）八月十七日の文武天皇即

位宣命（第一詔）や元明天皇慶雲四年（七〇七）七月十七日の元明天皇即位宣命（第二詔）の冒頭部をほぼ襲用した表現である。

第一段の元明天皇に対する修辭の

高天原に神留り坐す皇親神魯岐・神魯美命の、吾孫の知らさむ食国天下と、よさし奉りしまにまに、高天原に事はじめて、四方の食国天下の政を、弥高に弥広に天日嗣と高御座に坐して、大八嶋国知らしめす倭根子天皇

の表現は、文武天皇即位宣命第一段の

高天原に事初めて遠天皇祖の御世、中・今に至るまでに、天皇が御子のあれ坐さむいや継々に、大八嶋国しらさむ次と、天つ神の御子ながらも、天に坐す神の依し奉りし隨に、この天津日嗣高御座の業と、現御神と大八嶋国知らしめす倭根子天皇命

の表現を踏まえている。

聖武即位宣命第一段の元正天皇の聖武に対する詔の引用部分の

「此食国天下は、掛けまくも畏き藤原宮に、天下知らしめしし、みましの父と坐す天皇の、みましに賜ひし天下の業」

の表現は、元明天皇即位宣命の

関くも威き藤原宮に御宇しし倭根子天皇、丁酉の八月に、

此の食国天下の業を

を踏まえている。

聖武即位宣命第二段を見てみよう。聖武即位宣命における元明天皇の詔の引用の、

掛けまくも畏き淡海大津宮に御宇しし倭根子天皇の、万世に改るましじき常の典と、立て賜ひ敷き賜へる法の隨に、後遂には我子に、さだかにむくさかに、過つ事無く授け賜へ

は、元明天皇即位宣命の、

是は関くも威き近江大津宮に御宇しし大倭根子天皇の、天地と共に長く日月と共に遠く改るましじき常の典と立て賜ひ敷き賜へる法を、受け賜り坐して行ひ賜ふ事と衆受け賜りて、

を受けている。もう一箇所、元明即位宣命の第三段に見られる類同表現、

天地と共に長く遠く改るましじき常の典と立て賜へる食国の法は、文武即位宣命の百官人等が拠る「国の法」を受けての表現と言える。

次に、聖武即位宣命第二段の皇位継承に対する聖武天皇の心と臣下への要請の部分掲げよう。

進むも知らに退くも知らに、天地の心も^{いたは}重しく、百官の情も辱^{かたじけな}み愧^{はづか}しみなも、神ながら^{かむ}念^{おも}し坐す。故、親王等を始めて王たち臣たち汝たち、清き明き正しき直き心を以て、皇が朝を^{おほみこと}あななひ扶^{たす}け奉りて、天下の公民を奏^{まを}し賜へと詔りたまふ命を、衆聞きたまへと宣る。

この部分は、文武即位宣命第二段の

明き^{あか}浄き直き誠の心を以て、御称^{みはかり}たりて緩^{ゆる}び怠^{おこた}る事なく、務め結りて仕へ奉れと詔りたまふ大命を、諸聞きたまへと詔る。

や、文武天皇が、藤原不比等が歴代天皇に仕奉してきたことを賞する宣命(第二詔)の、

掛けまくも畏き天皇が御世御世仕へ奉りて、今もまた、朕が卿^{みづかみ}と為て、明き^{あか}浄き心を以て、朕を助け奉り仕へ奉る事の、重しき^い労^{いたは}しき事を念^{おも}ほし坐す御意坐すに依りて、たりたまひてややみ賜へば、忌み忍ぶる事に似る事をしなも、常^{つね}労^{ねいたは}しみ重し^いみ念^{おも}ほし坐さくと宣りたまふ。

や、元明天皇即位宣命第二段の元明の心情を表した次掲部分、

遍^{たひまね}多く日重^かねて譲り賜へば、^{いたは}労^{かし}しみ威^{かし}み、今年の六月十五日に、「詔^{わさめこと}命は受け賜ふ」と白^ましながら、此の重位^{かしゝゐ}に継^つぎ坐^すす事をなも天地の心を^{いたは}労^{あめつち}しみ重^いしみ畏^{かし}み坐さくと詔りたまふ命を衆聞き

たまへと宣る。

や、さらに元明天皇の和銅改元の宣命(第四詔)の、

今皇朕御世に当りて坐せば、天地の心を^{かたじけな}労^{かし}しみ重^いし辱^{かたじけな}み坐すに恐^{かしこ}み

などを踏まえていると言える。

聖武天皇即位宣命(第五詔) 第三段の即位に際しての大赦や授位についての詔の部分の、

辞^{こと}別^わけて詔りたまはく、遠^{とほ}皇祖^{すめらみ}の御世を始めて、中・今に至るまで、天日嗣と高御座に坐して、此の食^を国^{くに}天下^{あめつち}を撫^なで賜^{たま}ひ慈^{あは}しび賜はくは時々^{ときとき}状^{さま}々に從^{したが}ひて、治^さめ賜^{たま}ひ慈^{あは}しび賜ひ来る業と、神ながら^{かむ}念^{おも}し行^ゆす。是^{こゝ}を以て先づ天下を、慈^{あは}しび賜^{たま}ひ治^さめ賜はく、天下に大赦す。

は、文武即位宣命第一段の

遠天皇祖の御世、中・今に至るまでに、……この天津日嗣高御座の業と、……受け賜り恐^{かしこ}み坐して、この食^を国^{くに}天下^{あめつち}を調^{ととの}へ賜^{たま}ひ平^{ひら}げ賜^{たま}ひ、天下の公民を^{あめつち}恵^{めぐ}み賜^{たま}ひ撫^なで賜はむとなも、神ながら^{かむ}思^{おも}しめさくと詔りたまふ天皇が大命を、諸聞きたまへと宣る。

や、元明即位宣命第三段の

遠皇祖の御世を始めて、天皇が御世御世、天つ日嗣と高御座に坐して此の食国天下を撫で賜ひ慈しび賜ふ事は、辞立つに在らず、人の祖の意能が弱兒を養治す事の如く、治め賜ひ慈しび賜ひ来る業となも、神ながら念し行す。是を以て、先づ先づ天下の公民の上を慈しび賜はく、天下に大赦したまふ。

を踏まえていると言うことができる。

以上の考察によって、聖武天皇の即位宣命（第五詔）が、先代の文武天皇や元明天皇の即位宣命や他の宣命の表現を踏まえて成されていることが知られる。

宣命の文案に関わったのは中務省の官人であろう。清水克彦氏が述べるように、その文案を中納言の立場にあつた大伴旅人は見る機会、「字面に接する機会をも持った」と思われる。叙上の聖武天皇の即位宣命の表現形成に拠れば、聖武天皇以前の文武天皇や元明天皇の宣命についても、中納言大伴旅人は、中務省の官人同様、把握していたと思われる。聖武即位宣命の「万世尔不改常典止」のみならず、清水氏が判断を保留した元明天皇即位宣命の

- ・与天地共長、与日月共遠、不改常典
- ・天地之共長遠不改常典

の表現については、それをも踏まえて、三二五番歌の「天地と長く久しく 万代に改らずあらむ」（天地与長久 万代爾不改将有）の表現

を成したと見るのが妥当と思われる。

四、聖武天皇の即位宣命の表現考Ⅱ——祝詞との関連

前節の考察によって、聖武天皇即位宣命は文武天皇や元明天皇の即位宣命やその他の宣命の表現を踏まえていることが明らかにされた。そして、さらに、その表現形成に祭の儀式のときとなえる祝詞が深く関わっていると考えられる。

聖武天皇が即位した神亀元年（七二四）の二月四日は、祈年祭の日に当たることを指摘したい。

祈年祭の祝詞を見てみよう（本文は、日本古典文学大系『古事記 祝詞』一九五八年六月五日、岩波書店発行に拠る）。

聖武天皇即位宣命の

高天原に神留り坐す皇親神魯岐・神魯美命（原文「高天原尔神留
坐皇親神魯岐・神魯美命」）

と同様の

高天原に神留り坐す皇睦神漏伎命・神漏彌命（原文高天原尔神留
坐皇睦神漏伎命・神漏彌命）

の表現が、祈年祭祝詞に存する（他にも「六月の晦の大祓」鎮火の祭」「大嘗の祭」「御魂を齋戸に鎮むる祭」「中臣の壽詞」などの祝詞に見られる）。また、聖武即位宣命の

辞別けて詔りたまはく(原文「辞別詔久」)

の傍線部の表現も祈年祭祝詞に見られる(他に「六月の月次」「大殿祭」「大嘗の祭」「齋の内親王を奉り入るる時」等の祝詞。「大殿祭」には「詞別」の文字使用)。

聖武即位宣命冒頭の

現神と大八洲知らしめす倭根子天皇(原文「現神大八洲所知倭根子天皇」)

と類同の表現は、「中臣の壽詞」の冒頭にも存する(原文は「現御神止大八嶋国所知食須大倭根子天皇」)。

また、聖武即位宣命の先掲「高天原に神留り坐す皇親神魯岐・神魯美命」につづく、

吾孫の知らさむ食国天下と、よさし奉りしまにまに、高天原に事はじめて、四方の食国天下の政を、弥高に弥広に天日嗣と高御座に坐して、大八嶋国知らしめす倭根子天皇(原文「吾孫將知食国天下止与佐斯奉志麻尔々々、高天原尔事波自米而、四方食国天下乃政乎、弥高弥広尔天日嗣止高御座尔坐而、大八嶋国所知倭根子天皇」)

の傍線部の表現も、「中臣の壽詞」に

「皇孫の尊は、高天の原に事始めて、豊葦原の瑞穂の国を安国と平らけく知ろしめして、天つ日嗣の天つ高御座に御坐しましめて、天つ御膳の長御膳の遠御膳と、千秋の五百秋に、瑞穂を平けく安らけく、齋庭に知ろしめせ」と事依さしまつりて

とある(「高天の原に事始めて」は「道の饗の祭」の祝詞にも見られる)。

右掲の聖武即位宣命の波線部の「弥高に弥広に」(原文「弥高弥広尔」)の表現は、「平野の祭」の祝詞に、

また申さく、「参る集はりて仕へまつる、親王等・王等・臣等・百の官人等をも、夜の守り日の守りに守りたまひて、天皇が朝廷に、いや高にいや広に、茂しやくはえの如く、立ち栄えしめ仕へまつらしめたまへと、稱辞竟へまつらく」と申す。

とある(原文「伊夜高尔伊夜広尔」。「久度・古関」の祝詞も同じ文章。原文は「弥高尔弥広尔」)。平野神社も久度・古関の神社も、もともと大和の国にあった神社で、その祝詞の原核の表現は古くから伝わる表現と見られる。これらの祝詞中の「親王等・王等・臣等・百官人等」(他に「大殿祭」「六月の晦の大祓」「中臣壽詞」などの祝詞に見られる)は、聖武即位宣命に「親王・諸王・諸臣・百官人等」とあるのと類同の表現である。聖武即位宣命には、「百官人等」の次に「天下公民」の表現があるが、これをも伴った形は、「広瀬の忌の祭」「道の饗の祭」の祝詞に見られる。

聖武天皇即位宣命の「食国天下」の表現も、「大殿祭」の祝詞に見られる。

以上の考察に拠れば、聖武即位宣命が、成立の古いと推定される「祈年祭」「出雲の国の造の神賀詞」「大祓の詞」「大殿祭」「中臣の壽詞」などの祝詞の表現を踏まえていることは確実であろう。そして、聖武即位宣命が踏まえたそれらの祝詞は、文武や元明の宣命の表現にも溯って適用できよう。

大伴旅人の吉野讃歌の反歌三一六の「いよよさやけく」（原文「弥清」）は、祝詞の「いや高にいや広に」（原文「伊夜高尔伊夜広尔」「弥高尔弥広尔」）の表現を踏まえたと思われる聖武即位宣命の「弥高に弥広に」（原文「弥高弥広尔」）を意識しての表現と換言できよう。

五、大伴旅人の吉野讃歌と山部赤人の富士讃歌との関連についての考察を踏まえての、赤人富士讃歌と聖武天皇即位宣命などの天皇宣命や祝詞との関連

上述のように、神亀元年（七二四）三月の大伴旅人の吉野讃歌と同じ年の四月作と考えられる山部赤人の富士讃歌は、吉野の「山」と「富士の山（富士の高嶺）」という聖なる山を中心とする山水歌群としてリンクする。山部赤人の富士讃歌を掲げて、さらに両歌群の関連を表現に即して考えてみよう。

山部宿禰赤人、富士の山を望る歌一首并せて短歌
 天地の分れし時ゆ 神さびて高く貴き 駿河なる富士の高嶺を
 天の原振り放け見れば 渡る日の影も隠らひ 照る月の光も
 見えず 白雲もい行きはばかり 時じくぞ雪は降りける 語り
 告げ言ひ継ぎ行かむ 富士の高嶺は（三二七番歌）

反歌
 田子の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける（三二八）

赤人富士讃歌の長歌三一七の初句「天地」は、旅人の吉野讃歌の長歌三一五の「天地」を受ける語である。また「神さびて高く貴き」は、同じく旅人の長歌三一五の「山からし貴くあらし」を受ける表現と考えられる。また、赤人歌三一七の「駿河なる富士の高嶺を天の原振り放け見れば」と反歌三一八の「田子の浦ゆうち出でて見れば」の空間表現（前者は下から上へ、後者は水平方向）における「見れば」は、旅人の吉野讃歌の反歌三一六の「昔見し象の小川を今見れば」の時間表現における「見れば」を意識しての表現と捉えられる。さらに、赤人富士讃歌の長歌三一七の歌い収めの「語り告げ言ひ継ぎ行かむ富士の高嶺は」は、旅人の吉野讃歌の長歌三一五の「万代に改らずあらむ行幸しの宮」の歌い収めを意識しての表現と見られる（三二七の助動詞「む」は意志、三二五の助動詞「む」は推量の意味）。このように、赤人は旅人の吉野讃歌の表現をしかと意識して、富士讃歌をなしたと考えられる。

旅人の吉野讃歌は、聖武即位宣命の「万世尔不改常典止」や「天地」、祝詞の表現を踏まえた「弥高弥広尔」、元明即位宣命の「与天地共長与日月共遠不改常典止」「天地之共長遠不改常典止」などを原文表記まで意識して織り成した歌である。

そう捉えることができるならば、上述のように、旅人の吉野讃歌と密接に関わって誕生した赤人の富士讃歌も、天皇宣命や祝詞の表現を踏まえていると考えられる。

前掲拙論「万葉集卷三の山を主とする山水歌群における山部赤人の富士歌と高橋虫麻呂の富士歌」の中で推定したように、山部赤人は富士讃歌を詠み成した時は、中務省の官人であったと考えられる。中務省は、「律令制の八省の一。天皇の側近に侍従し、詔勅の文案を審署」する省である（『広辞苑』第五版、一九九八年十一月十一日、岩波書店発行に拠る）。本稿第三・四節に考察したように、聖武天皇即位宣命は、文武天皇や元明天皇の、祝詞の表現を踏まえた宣命やその他の宣命を考慮して成されている。山部赤人が中務省の官人で宣命などの審署に関わっていたならば、文武天皇以降の宣命や古くから伝わる祝詞の表現を知っていたであろう。その点に留意して考察する必要がある。

赤人の富士讃歌を具体的に見てゆこう。長歌三一七冒頭の「天地の分れし時ゆ」は、聖武即位宣命の「天地の」の表現や次の表現の想起と関わるであろう（口語訳も掲げる）

高天原に神留り坐す皇親神魯岐・神魯美命の、吾孫の知らさむ食国天下と、よさし奉りしまにまに、高天原に事はじめて、四方の食国天下の政を、弥高に弥広に天日嗣と高御座に坐して、大八嶋国知らしめす倭根子天皇（後略）

高天原にまします皇祖の男神女神が、わが子孫の統治すべき食国天下であると子孫に委ねられたまに、高天原から始まり天下四方の国土にまで至った統治をいよいよ高くいよいよ広く、皇祖の子孫として皇位にあってこの大八嶋国を統治してこられた倭根子天皇、すなわち元正、の意（先掲『続日本紀』二二三九頁）

脚注（四）

右の表現を想起することによって、『古事記』上つ巻の序の

乾坤初めて分かれて、參神造化の首となり、陰陽ここに開けて、二靈群品の祖となりき。

天と地が初めて分かれて、天之御中主神・高御産巢日神・神産巢日神の三神が創造の初めとなり、男女の両性がここに始まり、伊耶那岐命（男神）・伊耶那美命（女神）が万物の祖となった。（訓み下し文と口語訳は、西宮一民校注『古事記』昭和五十四年六月十日、新潮社発行に拠る）

や、上巻本文の最初の

天地初めて発りし時に、高天の原に成りませる神の名は……

の表現を考慮して成されたのが「天地の分れし時ゆ」の表現と考えられる。

「天地の分れし時ゆ」の次の「神さびて」も聖武即位宣命の「神ながらも念し行す」（例、「神ながら念し坐す」の計三例の「神ながら」を意識することによって、持統天皇の吉野の宮行幸の時に柿本人麻呂が詠んだ吉野讃歌（巻一・三六―三九番歌）の第二長歌三八の「やすみししが大君 神ながら神さびせすと」（「安らかに天の下を支配される我が大君が、神であるままに神らしく振る舞われるとて」の意）

や、同じく人麻呂が「輕皇子、安騎の野に宿ります時に」作った歌（卷一・四五～四九番歌、輕皇子は後の文武天皇）の「やすみしし我が大君高照らす日の御子 神ながら神さびせすと」の傍線部の表現を想起し、「神ながら」の下の名詞「神さび」の動詞形「神さぶ」を用いたものと考えられる。

「神さびて」につづく「高く貴き」（原文「高貴す」）は、大伴旅人の吉野讃歌の長歌三二五の「山からし貴くあらし」や、旅人が踏まえたのと同様に、聖武即位宣命の先掲部分の「弥高に弥広に」を意識しての表現と考えられる。さらに、「神さびて」の表現と同様に、人麻呂の吉野讃歌の第一長歌三六の「この山の いや高知らす」（原文「此山乃弥高思良珠」）も念頭に存したであろう。

「高く貴き」とある点は、上述の例とともに、次のような卷十三・三三三四番歌の傍線部「山見れば高く貴し」を踏まえたことを物語る。

やすみしし我ご大君 高照らす日の御子の きこしをす御食つ
国 神風の伊勢の国は 国見ればしも 山見れば高く貴し 川
見ればさやけく清し 水門なす海もゆたけし 見わたしの島も
名高し ここをしもまぐはしみかも かけまくもあやに畏き
山辺の五十師の原に うちひさす大宮仕へ 朝日なすまぐは
しも 夕日なすうらぐはしも 春山のしなひ栄えて 秋山の色
なつかしき ももしきの大宮人は 天地と日月とともに 万代
にもが（三三三四）

反歌
山辺の五十師の御井はおのづから成れる錦を張れる山かも（三

一三五

この歌について、伊藤博『萬葉集釋注七』（一九九七年九月二十五日、集英社発行）には、「持統六年（六九二）三月六日～二十日、伊勢行幸があった。その折の詠か。」と推測した上で、

『続日本紀』によれば、伊勢行幸は、元正朝養老二年（七一八）二月などにもあった。伊勢を目的とする行幸ではなかったけれども、当面の歌群がこの折にも誦詠されたとしても、不思議はない。この歌群には、奈良朝の新しい発想を含む面があるので、持統朝の頃に原核を成した歌が、誦い続けられてしだいにふくらんだということも考えられる。

と述べている。そして長歌三三三四の「大宮仕へ」という表現に就いては、

天皇を中心とする大宮人全体が立派に行宮を営んで勢揃いしていることをいつているわけで、実際にはそこで神祭りをしているのかもしれない。

と想像している。

長歌三三三四の末尾五句の「ももしきの大宮人は 天地と日月とともに 万代にもが」（傍線部の原文「天地与日月共」）は大宮人の永遠性を希求する表現で、傍線部の表現は万葉集では柿本人麻呂の卷二・二二〇番歌や大伴家持の「京に向ふ路の上にして、興に依りて

預め作る侍宴応詔の歌一首并せて短歌」(巻十九・四二五四～五番歌)にも用いられている。これはまた「出雲の国の造の神賀詞」や「齋の内親王を奉り入るる時」の祝詞にも用いられている。原文は前者は「天地日月等共尔」、後者は「天地日月止共尔」。「中臣の壽詞」にも「天地月日と共に」(原文「与天地月日共」とあることを考慮すると、当面歌の「天地日月と共に」は祝詞に拠る表現と考えられる。

反歌三三三五の「おのづから成れる錦を」(原文「自然成錦乎」)の傍線部の表現は万葉集中に一例の表現であるが、元明天皇の和銅元年(七〇八)正月十一日の和銅改元の宣命(第四詔)の中に

聞し看す食国の中の東の方武蔵国に、自然に成れる和銅出で在りと奏して献れり。

と見えるので(傍線部の原文は「自然成」。「成」の字の上に「作」の字のある写本があるけれども、それは採らない。文脈上「作」の字があるのは不自然、元明天皇の宣命の作製にたずさわった人物に拠る歌の可能性が考えられる。先掲『釋注』に説く原核のふくらみが見て取れるのである。以上の三三三四～五番歌についての考察に拠れば、三三三四の「山見れば高く貴し」の傍線部の表現も、天皇の宣命などの表現を踏まえての応用である可能性がある。

調べるに、文武天皇の即位宣命の中に引用されている持統天皇の大命に

この天津日嗣高御座の業と、現御神と大八嶋国知らしめす倭根子天皇の、授け賜ひ負せ賜ふ貴き高き厚き大命

とある。この部分を踏まえた聖武天皇の天平改元の宣命(第六詔)には

此は太上天皇の厚き広き徳を蒙りて、高き貴き行に依りて顕れる大きな瑞の物ぞと詔りたまふ命

とある(この宣命は赤人富士歌以後の例)。

このような事例を考えると、三三三四の「山見れば高く貴き」は、天皇の徳行を讃える「高く貴し」を自然の山に適用したということが考えられる。

以上の考察に拠れば、山部赤人の富士讃歌の長歌三二七の「高く貴き駿河なる富士の高嶺を」も、三三三四番歌と同様、直接的に、または三三三四番歌を通して間接的に、文武即位宣命中の「貴き高き」を富士の高嶺に応用した表現と考えられるのである。

「高く貴き駿河なる富士の高嶺を」「天の原振り放け見れば」と歌ってまず提示されているのが、富士の高さを強調する「渡る日の影も隠らひ照る月の光も見えず」(原文「度日之陰毛隠比照月乃光毛不見」)の表現。

表面的には自然の描写であるが、この部分にも、聖武天皇即位宣命などの宣命の表現形成に踏まえたと考えられる祈年祭などの祝詞に次掲のように見られる「天の御蔭・日の御蔭と隠りまして」(原文「天御蔭・日御蔭尊隠坐豆」。「天や太陽から隠れる所とお隠れになって」の意で、「宮殿内に住むことをいう」)。先掲『古事記 祝詞』祈年祭祝詞の三八九頁頭注二五の表現を意識して、富士の山が天の太陽や月の光をさえぎって天皇を守る立派な御殿的存在である意を込められていると考え

られる。

・皇神の敷きます、下つ磐ねに宮柱太知り立て、高天の原に千木高知りて、皇御孫の命の瑞の御舎を仕へまつりて、天の御蔭・日の御蔭と隠りまして、四方の国を安国と平らけく知らしめすが故に……

・山の口に坐す皇神等の前に白さく、飛鳥・石村・忍坂・長谷・畝火・耳無と御名は白して 遠山・近山に生ひ立てる大木・小木を、本末うち切りて持ち参る来て、皇御孫の命の瑞の御舎仕へまつりて、天の御蔭・日の御蔭と隠りまして、四方の国を安国と平らけく知らしめすが故に、皇御孫の命のうづの幣帛を稱 辞竟へまつらく」と宣る。

(以上、「祈年祭」祝詞に拠る。前者と同様の表現は「六月の月次」「六月の晦の大祓」の祝詞などにもある)

後者の例は山との関わりで、「天の御蔭・日の御蔭と隠りまして」とある。この点に留意すると、すぐさま想起される万葉集歌がある。それは、「藤原の宮の御井の歌」(巻一・五二「三番歌」である。

やみしし我ご大君 高照らす日の御子 荒栲の藤井が原に 大御門始めたまひて 埴安の堤の上に あり立たし見したまへは 大和の青香具山は 日の経の大き御門に 春山と茂みさび立てり 畝傍のこの瑞山は 日の緯の大き御門に 瑞山と山さびいます 耳成の青菅山は 背面の大き御門に よろしなへ神さ

び立てり 名ぐはし吉野の山は 影面の大き御門ゆ 雲居にぞ遠くありける 高知るや天の御蔭 天知るや日の御蔭の 水こそばとこしへにあらめ 御井の清水(五二)

傍線部の表現は先掲の祝詞の表現と密接に関わることを指摘したい。一首の中では、藤原宮の東西南北の聖山を讃える文脈を受けている。それゆえ、伊藤博『萬葉集釋注一』(一九九五年十一月二十五日、集英社発行)には、歌の傍線部を「佳き山々に守られた、高く聳え立つ御殿、天いっぱいに広がり立つ御殿」と傍線部の言葉を的確に補って、妥当な口語訳を施している。

この歌は、「耳成の青菅山は 背面の大き御門に よろしなへ神さび立てり」と、山に「神さぶ」を用いている点も注目される。

山部赤人はこの「藤原の宮の御井の歌」の表現をも想起して、富士讃歌を織り成したと考えられる。

富士讃歌の「渡る日の影も隠らひ 照る月の光も見えず」につづく「白雲もい行きはばかり 時じくぞ雪は降りける」は、白雲と雪による表現で、その雪は、反歌三八では白雲の白よりも白い「真白」と強調されている。清く清けく貴い瑞として富士の「真白」の雪が歌われているのである。

このことは、聖武天皇即位宣命中の元正天皇の詔に、元正から皇位を継承する聖武天皇の徳を天が讃え、その治世の始まりの元号を記念すべく出現させた「大々瑞物」の白亀(先掲『続日本紀二』補注9三九参照)の「白」と関わるであろう。祈年祭の祝詞にも見られる神前に供え讃える白い動物(白馬・白猪・白鶏など)の「白」とも関わるであろう。

六、聖武天皇の即位寿歌としての機能

——赤人富士歌と虫麻呂富士歌——

以上、考察してきたように、山部赤人の「富士の山を望る歌」は、単なる自然観賞の歌ではなく、大伴旅人の吉野讃歌と同様に、文武天皇・元明天皇の即位宣命や他の宣命、祝詞の表現を踏まえて成された聖武天皇の即位宣命や祝詞そのものの表現を踏まえて、神亀元年（七二四）二月四日の聖武天皇の即位を寿ぎ、神亀という元号の新時代の幕開けを寿ぐ心をこめた歌と考えられる。

このことのいつそうの保証のために、宣命や祝詞を踏まえた万葉集歌の一端を挙げておきたい。

大伴家持の「陸奥の国に金を出だす詔書を賀く歌一首并せて短歌」〔巻十八・四〇九四く四〇九七番歌〕は、天平二十一年（七四九）四月一日の二つの詔（第二詔・第三詔）を踏まえての作であることが知られている。

先に触れた家持の「京に向ふ路の上にして、興に依りて預め作る侍宴応詔の歌一首并せて短歌」〔巻十九・四二五四く五番歌〕も、先述のように祝詞の表現を踏まえた表現が織り込まれている。巻十八・四一二番歌の「馬の爪い尽す極み」も、「祈年祭」祝詞などに見られる「——極み」の表現と「馬の爪の至り留まる限り」の表現を考慮しての表現であろう。

「祈年祭」や「六月の月次」祭の祝詞に見られる「谷蟻のさ渡る極み」は巻五・八〇〇番歌や巻六・九七一番歌に見られ、同じく「祈年祭」の「白雲の墮り坐向伏す限り」や「六月の月次」祝詞の「白雲の向伏す限り」と巻十三・三三二九番歌の「青雲の向伏す」との

関連も考えられる。

山部赤人の「富士の山を望る歌」が、単なる富士の自然詠ではなく、聖武天皇即位寿歌としての機能を有すると考えられるならば、赤人の富士歌の影響を受けて高橋虫麻呂が神亀元年（七二四）六月に詠んだと推定される「富士の山を詠む歌一首并せて短歌」〔巻三・三一九く三二番歌〕の表現にも、赤人富士歌と同様に聖武天皇即位を寿ぐ心が込められていると考えられる。虫麻呂富士歌の長歌を見てみよう。

並吉みの甲斐の国 うち寄する駿河の国と こちごちの国のみ
中ゆ 出で立てる富士の高嶺は 天雲もい行きはばかり 飛ぶ
鳥も飛びも上らず 燃ゆる火を雪もち消ち 降る雪を火もち消
ちつつ 言ひも得ず名付けも知らず くすしくもいます神かも
せの海と名付けてあるも その山の堤める海ぞ 富士川と人
の渡るも その山の水のたぎちぞ 日の本の大和の国の 鎮め
ともいます神かも 宝ともなれる山かも 駿河なる富士の高嶺
は 見れど飽かぬかも（三一九番歌）

注目したいのは傍線部の表現とその原文表記である。傍線部①の原文は「霊母 座神香聞」、傍線部②の原文は「日本之 山跡国乃 鎮十方 座祇可聞 宝十方 成有山可聞」である。「かみ」の表記を「神」と「祇」の二つに使い分けている。万葉集中には、「天地乃神祇」〔巻三・四四三〕、「天地之神祇」〔巻四・六五五、巻十三・三二八四〕、「天地神祇」〔巻四・五四六〕、「玄黄之神祇」〔巻十三・三二八八〕の例があり、「天神阿布芸許比乃美 地祇布之豆額拜」（天つ神仰ぎ祈

ひ禊^のみ 地^{くに}つ 祇^{かみ}伏^ふして 額^{ひつぎ}つき (巻五・九〇四) の例がある。これらの例を考慮すると、虫麻呂富士歌においても文脈上、「神」の表記は、富士が天つ神的存在であることを示し、「祇」は地つ神的存在であることを物語っていると捉えられる。富士は天つ神と地つ神の両面の品格を備えていることを虫麻呂は表わしたと言える。そして「宝とも成れる山かも」と続くことを見れば、想起される宣命がある。それは、元明天皇和銅元年(七〇八)正月十一日の和銅改元の宣命(第四詔)である。

如^か是^く治^ちめ賜^みひ慈^じしび賜^みひ来^くる天^{あま}つ日^ひ嗣^{つぎ}の業^{わざ}と、今^{いま}皇^{すめ}朕^み御^み世^よに当^{あた}りて坐^いせば、天地^{あめ}の心^{こころ}を勞^{いたは}しみ重^いしみ辱^{かたじけな}み恐^{おそ}み坐^いすに、聞^{きこ}し看^みす食^{をく}国^{くに}の中^なの東^{あづま}の方^{かた}武^む藏^{ざう}国^{くに}に、自然^{おのづから}に成^なれる和^わ銅^{どう}出^いで在^ありと奏^{そう}して献^{けん}れり。此^{この}の物^{もの}は、天^{あま}に坐^いす神^{かみ}・地^ちに坐^いす祇^{かみ}の相^{あひ}うづなひ奉^{ほう}り福^{ふく}はへ奉^{ほう}る事^{こと}に依^よりて、顕^{あき}しく出^いでたる宝^{たから}に在^あるらしとなも、神^{かみ}ながら念^{おも}ひ行^ゆす。是^{こゝ}を以^もて、天地^{あめ}の神^{かみ}の顕^{あき}し奉^{ほう}れる瑞^{みづ}宝^{ほう}に依^よりて、御^み世^よの年^{とし}号^{なづ}改^かめ賜^みひ換^かへ賜^みひと詔^{みこと}りたまふ命^{みこと}を衆^{しゆ}聞^{きこ}きたまへと宣^{のたま}ふ。

右^{みぎ}の「自然^{おのづから}に成^なれる」(原文「自然^{しぜん}成^なる」)の表現と巻十三・三三三五の「自然^{しぜん}成^なれる」(原文「自然^{しぜん}成^なる」)の関連については先述したが、虫麻呂はこの元明天皇の宣命の表現を富士歌に応用し、富士を天つ神・地つ神によって顕現した「宝」として詠み、聖武天皇即位を寿ぐ心をこめたのである。

(二〇二二年九月九日)

注

- 1、拙論「山部赤人の富士歌と高橋虫麻呂の富士歌の詠作年月と詠作事情」都留文科大学研究紀要第94集、二〇二一年十月二十日発行
- 2、小島憲之『上代日本文学与中国文学中』(昭和三十九年三月三十日、塙書房発行)の第五章には、赤人富士歌や旅人の三一五・巻十三・三三三四の、山を「貴」で表現することは中国的な表現によるものとみる。考慮すべき見解と思うけれども、本稿では「高く貴き」とある点を重視したい。
- 3、三一八番歌の「真白」については、万葉和歌史の観点からは次のように考えられる。天武天皇が理想とした「明・浄(清)」の世界観を具現化する色彩として持統天皇が二八番歌に「白妙」を用いてから(拙論「原撰万葉集五十三首本と伊勢神宮」国文学論考第59号、二〇二三年三月、都留文科大学国語国文学会発行)、その明浄なる「白」は宮廷歌人の柿本人麻呂歌の「白雪」(巻三・二六一番歌)、笠金村の吉野讃歌の「白木綿花」(巻六・九〇九番歌)、そして、当面の山部赤人の富士歌の「真白」の雪(巻三・三二八番歌)に受け継がれていると考えられる。万葉集最終の大伴家持の四五一六番歌の「降る雪」の清らかな白も、この系譜上に立つと言える(拙論「万葉集最終正月一日の永遠の吉事祈願の歌」都留文科大学大学院紀要第27集、二〇二三年三月発行)。
- 4、拙論「山部赤人の『富士の山を望る歌』と高橋虫麻呂の『富士の山を詠む歌』の影響関係」(都留文科大学大学院紀要第二十五集、二〇二二年三月発行)や注1拙論などを参照されたい。
- 5、「並吉^{なみよ}みの」(山の配列のすばらしいところの、意)の捉え方は、

拙論『なまよみの甲斐』考」(都留文科大学研究紀要第67集、二〇

〇八年三月発行)をはじめとする稿者の一連の論考などに拠る。

6、先掲『続日本紀一』一二七頁脚注一三に「天神・地祇。中国では昊天上帝・日月・星辰・司中・司命・風師・雨師などを天神、后土・社稷・五祀・五岳などを地祇というが、日本ではいわゆるアマツ神とクニツ神をいう。」とある。

7、このことは、虫麻呂も赤人と同様、官人として天皇の宣命に関わる任務の期間を持ったことを物語る。

付記

本稿の骨子は、二〇二二年七月十六日、山梨県立富士山世界遺産センターでの講演で述べた。

受領日 二〇二二年九月二九日

受理日 二〇二三年一月二日